110 周年記念78th RECITAL【2010 年（平成 18 年） 2 月 11/14 日】
大田区民ホール・アプリコ大ホール/兵庫県立芸術文化センターKOBELCO 大ホール

男声合唱組曲「吹雪の街を」

作詩／伊藤　整　作曲／多田武彦　指揮／隈　寛昭

Ⅰ　忍路
Ⅱ　また月夜
Ⅲ　夏になれば
Ⅳ　秋の恋びと
Ⅴ　夜の霰
Ⅵ　吹雪の街を

男声合唱組曲「吹雪の街を」

作詩／伊藤　整　作曲／多田武彦

＜「吹雪の街を」初演時の多田武彦によるメッセージ＞

伊藤整先生の詩集「雪明りの路」を感動的に読んだのは今から20年前の昭和34年のことだから、今日のステージで歌ってくれる諸君たちの生まれる前後の頃である。私の末の弟が関西学院グリークラブにいて、その縁で関学グリーが前年の「中勘助の詩から」につづいて新曲の委嘱をして来たときのことである。

同名の組曲は昭和35年初演されて以来、たくさんの大学や高校のグリークラブの諸君に愛唱されてきた。この組曲を歌ってから「いたどりの多い忍路から出る坂道」をわざわざ訪ねていった学生諸君もたくさんいたようだ。

「雪明りの路」PARTⅡは、昭和52年、組曲「緑深い故郷の村で」という表題で、天理教音楽研究会の男声合唱団の演奏、関学グリーの大先輩林雄一郎先生の指揮で初演された。詩集「雪明りの路」の序文に、「此の詩集の大部分を色づけているのは北海道の自然である。北海道の雪と緑である……」とあり、序文巻末の奥書に「緑深き故郷の村で　伊藤整」とあったところから表題を求めて作曲した。

昨年の秋、小樽商科大学グリークラブの諸君から新曲の委嘱を受けた。小樽で青春の貴重な時期を送るグリークラブの諸君が初演するのだから、出来ることなら先輩の伊藤整先生の詩で作曲をまとめることができれば、と思い、もう一度詩集「雪明かの路」をはじめからゆっくりと噛みしめながら読んでいった。この詩集には、もう一つのすばらしい流れがあった。多くの男性が若いころ経験するあの淡い青春の感傷と心の痛みが、ほのぼのと綴られていた。こうして「雪明りの路」PARTⅢとも言うべき組曲「吹雪の街を」がうまれた。詩集「雪明りの路」から生まれた三つの男声合唱組曲をかわるがわる歌って行くと、生涯にただ一度伊藤整先生とお会いしたときのことを想い出す。隣同志で組曲「雪明りの路」をきいたあと先生は、「私の書いたこのような自由詩が、こんなに抒情性の溢れた音楽となって大変嬉しい」といって私に握手を求められてこられた。あのときの先生の笑顔と暖かい手のぬくもりが、今、なつかしく想い出されてくる。

心あたたまる創作の機会を与えていただいた小樽商科大学グリークラブの諸君や先輩の皆さんに心から御礼を申しあげたい。